

母親の子育て意識

—親の欲求充足とこどもとの愛着の絆との葛藤について—

On the consciousness of the child-rearing of mothers ;
The conflict between the self-desire sufficiency of mothers and the mother-child bond

西本 望*・小河佳子**・本玉 元***

NISHIMOTO Nozomu*・OGAWA Yoshiko**・HONTAMA Hajime***

要旨

従来の子育てに関する研究では、こどもの発達に母親の子育ての態度や母子相互作用が、どのように影響を及ぼすかという観点のものが多かった。したがってそれらの先行研究では、母親自身の感情や母親がおかれている環境との関係が十分に明らかにされていないようである。そのため子育て意識についての研究では、一致した知見が得られていなかった。そこで、本稿では、こどもからの側面ではなく、その母親のとりまく身近な生活の環境、すなわちどのような状況のもとに母親とこどもがおかれていて、どのような子育て意識をもっているのか、について知ることによって、今後の母親、子育て、家庭支援のための一助としたいと考えた。今回の結果からは、親世代は孤立すると最も子育てに関する不安が高まり、祖父母とは同居せずに近くに居住ことが親世代にとって都合がよいこと、さらに親世代にとっては、祖父母世代の子育て意識とは異なり、子育てやこどもの存在は、自己の活動を妨げるものとする意識があったことをみいだした。

I. はじめに

これまでの母親の子育て(養育)意識に関する研究は、こどものどのような発達に影響を及ぼすか、という観点のものが多かったように考えられる。たとえば、母親の養育態度や母子相互作用の研究では、母親のとり態度、行動、こどもへの発達期待がどのようにこどもの発達に影響するかといったものである(東洋・柏木恵子・ヘス, R.D.;1981 など)¹。これらは、とくに母親の子育て態度や母子相互作用の研究では、母親自身の感情、母親が置かれている環境との関係が充分解明されているとは考えられない。

以上のような母親の意識、とくに感情的側面をとらえた先駆的な研究には、周産期を中心とするものが多い。たとえば、Robson, K.S. と Moss, H.S.(1970)²は、初産婦に面接を行い、出産後2日以内に、こどもに対する愛情を表明した者と、生後9週以内には何ら愛情を表明しなかった者との分け、前者は、妊娠中からこどもを有することに非常に熱心な気持ちが認められたと報告している。また日本においても、つわりや分娩時の苦悩の程度が母親の感情の発達に影響する事を指摘したものもある(花沢成一;1978³, 1979⁴)。これは、母親の感情の発達を妊娠、分娩過程の身体的、生理的要因との関連性のもとに検討したものである。さらに妊娠中から出産後にかけての縦断的研究では、妊娠

中のこどもを欲する気もちの強さと産後のこどもに対する肯定的感情との関連が一貫して認められている(大日向雅美;1981⁵, 高橋恵子; 1976)⁶。別の言い方をすれば、妊娠や出産を経験しても、自分のこどもに対して何も肯定的な気もちを抱けない母親が存在することになる。

一方で、母親の情緒的発達については、身体的・生理的要因によって必ずしも一方向的に規定されるのではなく、妊娠に対する心理的な構え方が検討されることが必要と報告(九嶋勝司;1966)⁷されているものもある。

それでは、どのような母親が肯定的意識をもてないのであろうか。母親によるこどもに対する意識や感情が、夫と妻との精神的絆と密接にかかわっていることが指摘されている(総理府青少年対策本部;1983)⁸。さらに、母親の学歴や就労形態も関連要因とされている。大日向(1982)⁹は、高校生以下のこどもをもつ957名の母親に質問紙調査を行い、母親の個人差について検討した。これによると母親の就労形態による差異はみられなかったが、学歴の高い母親の方が、否定的態度に対する評定値が高いという結果が得られた。これに対して柏木恵子(1982)¹⁰は、高学歴の女性だけを対象とした調査で、専業主婦(無職有配偶者女子)による子育てに対する意識が、こどもがいることによって、「やりたいことができなくてあせる」あるいは「関心や時間がと

* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)
** 神戸海星女子学院大学 (Kobe Kaisei College)
*** 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)

られて視野が狭くなる」,「育児ノイローゼが共感できる」といった育児や子どもに対する否定的消極的意識が高いことをみだした。さらに専業主婦である母親は、就労形態にかかわらず就労している母親よりも、現在の生活に対する欲求不満が非常に高いという。しかし、この調査で、回答した専業主婦である女性たちは就労への希望が強い傾向にあったので、このような結果になったという指摘もある(青木まり・松井豊・岩男寿美子;1986)¹¹。くわえて、金子智栄子・斉藤浩子・青柳肇(1982)¹²による幼児をもつ母親に対する調査では、就労形態により育児への自信と満足感に関する要因が異なることが示された。つまり専業主婦の場合、家庭的志向が強いほど育児への自信や満足感が強いが、就労主婦(有職有配偶者女子)では、職業に満足しているほど、育児への自信や満足感が強くなっている。ここで牧野カツコによる乳幼児をもつ母親を対象とした調査では、育児不安の程度と子どもの年齢・きょうだい数、家族形態などとは関連がみられなかったことが示されている(牧野;1982¹³, 1989¹⁴)。しかし、牧野は育児不安の程度に影響を与えている要因として、父親の協力そして母親自身の社会的な人間関係の広さであったと報告している。これに関して本村汎(1985)¹⁵によっても同様のことが報告されている。また原ひろ子(1987)¹⁶の研究では、調査対象者を10歳~15歳の子どもをもつ母親として子育てについての不安感と満足感に調査を行った。そこでは「妻の興味、関心に対する夫の理解度」と「夫婦の仲のよさ」とに関連のあることを明らかにしていた。このように母親の学歴および就労形態やその他の変数と子育てに対する意識との関係については、一貫した結果が得られていない。その原因として、個々の調査の回答者の属性が多岐にわたっていることが結果の混乱を招いている一因と考えられる。しかし、これらの研究から、母親が子育てに対してもつ意識と子どもとの単純な二者関係のみで成立するものではないことが示唆される。アメリカではホフマン(Hoffman, L.D., 1979)¹⁷が、就労している母親とその子ども、そして就労していない母親とその子どもとの比較から、親子の時間的なかかわりの違いが、子どもの発達に何らの差異を生じさせると仮説を立てて調査した。その結果からは、両者間には差異は認められなかった。しかしホフマンは母親と子どもがかかわる時間ではなく、むしろ母親と子どもがかかわる内容の濃さと強さによることを明らかにしている。すなわち専業主婦で1日子どもというよりは、母親が就労していても、後者の方が母子で過ごす時間が短くとも内容が充実しているという。また、この調査では、母親の就労形態の如何にかかわらず、子どもの発達に影響するのは、母親が就労する環境、すなわち、就労するにあたっての家族の特に夫の協力、就労する理由、社会の理解などのからみにより母親がどのような心理状態で就労するのかが、子育て意識に差がみられると報告している。

これらのことから、子どもの側面ではなく、その母親の生活全般への適応の度合いが、子育てへの意識に影響してくると考えられる。つまり家族形態、母親の就労の有無、家庭あるいは仕事に対する充足感の程度が、子どもに対しての感情や子育てに対する意識に影響を及ぼすと考えられる。また、それらの母親のもつ性格傾向も、子どもに対しての感情や子育てに対する意識の形成に関与すると考えられる。これらのことを考え、青木・松井・岩男(1986)は、母親を一人の人間としてとらえ、子育ての対する意識や感情が、子育て以外の活動への充足感とどのようにかわるか、について調査し、あわせて子育てに対して否定的になる母親はどのような特性をもつのかという調査も行った。その結果では、子育てに対する意識は、子どもとのかかわりと同時に、その母親の生活における充実感と自己評価と深く結びついていることを明らかにした。第一に子育てに対する否定的な意識が、母親自身の年齢ではなく第一子の年齢により異なることが示された。第二に子育てを肯定的にとらえていなくても、家庭外の活動で何らかの充足感を得ている場合は否定的意識が強くなることは少ない。一方で家庭内でも家庭外の活動にも充足感を覚えられない母親は、子育てを否定的に捉えることが示された。これまでも乳幼児の母親を対象とした研究では、同様の知見がえられている(金子他;1982, 牧野;1982)。

直井道子(1987)¹⁸は、夫の親と同居する主婦と別居する主婦の権威主義の程度を比較した調査を行った。その結果、夫の親との同居は、少なくとも主婦の権威主義的性格の維持あるいは再生産に対して一定の機能を果たしており、夫の親と別居している主婦よりも、より権威主義的にたらしめる方向に作用していることを明らかにした。同時に、この結論が、主婦に関してのみ妥当するものであるのかどうか、が重要となる。すなわち、夫の親と同居をするその子どもたちも、核家族の夫や子どもよりも権威主義的なのか、という問題を述べている。

近年では、高学歴化など種々の理由によって女性の結婚年齢が押し上げられてきているが、すでに中山慶子(1985)¹⁹は、1980年代に女性を対象とした職業調査の結果で「早く結婚し、出産、育児が一段落して職場復帰するというパターンは、崩れ始め、結婚、出産、育児を仕事と平行させていこうとする女性が増えてきた。子どもが18歳になるまで、高齢結婚をした女性たちは就労を待つわけにはいかなかった」と述べていた。

II. 親子関係におよぼす主要な環境要因

親子関係の背景となる環境要因について示したものたちもいる。たとえばクラウスとケネル(Klaus, M. H.& Kenell, J.H., 1982)²⁰は、愛着形成にかかわる、環境的な要因として次の項目をあげている。

(a) 不変な要因: 両親の背景; ①各両親が自分の母親から受

けた子育て、②両親の素質あるいは親からの遺伝、③文化的慣習、④家族および夫との関係、⑤前回妊娠時の経験、⑥妊娠の計画、経過および妊娠中のできごと。

(b) 変化する要因：医療・看護の業務内容；①医師、看護師²¹およびその他の医療従事者の行動。②分娩中のケアおよび支援（支援的同伴者ドゥーラ *doula*）＝母親が1人にされていないかどうか。③生後数日の母子分離の有無。④病院の規則・慣習。

上記の(a)と(b)が背景となって、出生後のこどもに生じてくる環境的状况としての問題点を次に示している。

(c) 効果的な子育ておよび愛着と子育ての障がい：①虚弱児症候群 (*vulnerable child syndrome*)：両親が病気になったこどもや入院していたこどもをいつもと違った仕方ですなわち過保護にしたり、逆に拒否したりして取り扱うため、こどもが障がいを受けやすくなった状態をいう。②親子関係の障がい。③事故。④ハイリスク新生児にみられる発達および情緒的問題。⑤養子にみられる行動上の問題。

これらのなかでとくに重大な事態になったときのものとして次のように列挙している。

(d) 重篤な障がい：①こどもへの虐待²²、②器質性疾患のない発育不全症候群 (*failure to thrive without organic disease*)：低出生体重児、疾病などの理由で入院した新生児の中に、分離されなかったこどもとの比較をすると、発育不全の症例が現われている。たとえば体重増加がみられなかったり、行動面が発達しなかったりする。

以上のように愛着形成にかかわる要因と問題点が示されている。それらのうち本稿では親と子の環境条件について、とくに (a) ①と④に着目して論じてゆく。

ここで近年の日本の社会状況から、親世代の子育てにかかわる可能性のある高齢者との関連をみると、高齢者が総人口に対する占める割合は年ごとに増加しつつあるといわれてはいるが、それらの人びととの同居世帯が増えているわけではない。つまり都市部や都市近郊部においては、住居問題等で核家族が多い²³。しかも地域には親族がいないし、コミュニティから各家庭は孤立している。したがって子育てにかかわるいわゆる育児相談できる相手が、見つからない場合がある。あるいは、こどもを保育所、幼稚園などの公的機関に長時間預けることができても、緊急に母親が外出しなければならぬときに、こどもを預ける場所（担い手や機関）がなかったりする。もしこどもを預ける場所として、両親の親すなわちこどもからいうと祖父母たちに、こどもを預けることがありえたとすると、このような社会状況のなかでは、同居ではないとはいえ、祖父母たちが孫の子育てに全く関係しないでいることも困難な時代となってきている。

したがって、祖父母との三世同居でなくとも、その三世層との関係が母親のこどもに対する子育て意識に心理的にも何らかの影響を与えていることが推察できる。

そこで西本望と小河佳子(2000)は、家族形態と母親の子育て意識との関連をみるために「祖父母との居住形態と母親の養育意識」の調査²⁴を行って、次のことを見出した。母親は自分の育った環境と意識の相違が少ない母方祖父母と同居する方が、父方とするより葛藤が少なく精神的負担は軽いと考えられたが、母方祖父母同居世帯の対象数が些少であったため明確な結果は得られなかった。父方祖父母近距離居住型核家族世帯の母親は、父方祖父母が近隣であることからの意識かもしれないが、自分の子育てに肯定的で、彼らはそれに協力していない、と考えている。ここでは母親にとって最も適切である家族形態は見出せなかったが、父方・母方双方の祖父母が近距離居住型の核家族世帯では、いずれの項目でも唯一否定的な得点群に位置することはなかった。さらに本稿では核家族を一括して論じるのではなく、物理的距離で類別され得ることが可能となった。それには近隣に祖父母が居住していれば相互作用が頻繁となり、母親の意識は肯定的になる。しかし父方・母方の両祖父母から遠方に住み、家族が地域との孤立を前提とすると、接触や助言を得る契機が少なく母親の意識は否定的となったと考えられた。つまり育児不安に最も陥りやすい可能性のあるのは孤立した核家族の母親である。ここで第一子を産む年齢が高い程、母であることに充実感をもち、子育てを負担に感じていないとする傾向が明らかになった。

さらに本研究者は歴史的研究にあわせて、その理論²⁵を裏付けるために、子育て観や子育ての実態を探るための調査を実施し報告してきた(西本&本玉;2006, 2007)。ここでは祖父母世代と親世代からの聞き取り調査から、こども観や子育て意識が、世代間でどのように受け継がれ、どのように変容してきたのか、それらの世代の意識について比較研究をおこなった。たとえば、すでに調査報告書等²⁶と同様に本調査でもみられたものとしては、かつて親は、こどもを「宝」であるとみなしたり、誕生したこどもを「授かりもの」であるとしたりした。すなわち親にとっては、こどもの存在や誕生は自己の意思ではどうにもならないもの、と考えていた。しかしながら、現在では、こどもを親が「つくるもの」であって、こどもの存在や子育てでのかわり方の選択は、親の意思決定によるものになったとされる。このような実態から親がこどもに対して愛着 (*attachment*) とされる情緒的な絆 (*bond*) について明らかにしようと試みた。こどもの愛着行動の分析結果では、すでにエインスワース (*Ainsworth, M.D.*)²⁷らが、ストレンジ・スチュエーションの実験によるから対人関係に関するパーソナリティに、安定型、回避型、アンビバレンツ型の3タイプがあることを見出している。これらのように、こども側から、あるいはこどもに焦点をあてた愛着形成 (*attachment*) についての研究が発展してきた。その後成人の愛着研究についてもヘイザンとシェイバー (*Hazan, C. & Shaver, P.*;1987)²⁸が同様に、これらのタイプが存在するこ

とを明らかにした。ただしそこではパートナーについての事柄について両親や子ども期の記憶の関連からの尺度を示したものである。本論では、前述したように親の子育て意識を中心として、親から子への愛着の絆に着目して検討してゆくこととする。

III. 親と子の絆と葛藤

3-1. 母親の子育ての負担と葛藤

西本と小河の調査(2000)では、母親の取り巻く生活環境が、子どもに対しての情緒的表出や子育てに対する意識の形成に関与することを明らかにした。たとえば子どもを預けるところとして、両親の親すなわち子どもからいうと祖父母たちに、子どもを預けることによって、家族形態や母親の就労形態の違いによって、家庭あるいは仕事に対する充足感が、子どもに対しての情緒的表出や子育てに対する意識に影響を及ぼすことを示した。すなわち現在の日本社会にみられるように、高齢者人口の割合が増加しつつあるなかで、子どもと高齢者とのかかわりが必然性を帯びてくる。このかかわりが、子どもを育てるにあたって、母親と子どものかかわりなかでも母親の子育て意識に変化をもたらす。つまり子どもと母親をとりまく身近な生活環境である家族成員の構成やその援助が子育て意識に負担にもあるいはその軽減にもなることが明らかとなった(西本&小河;2000)。たとえば核家族形態の母親の方が直系家族形態の母親よりも子育てに負担を感じやすい傾向がみられた。つまり核家族世帯の母親の方が直系大家族世帯の母親よりも子育てに負担を感じやすく、しかも育児の疲れやゆとりのなさがあるという。

家族形態をみるにあたっては、祖父母との同居の場合、父方、母方どちらと同居するかにより母親の子育て意識は異なっている。母方と同居であれば祖父母が子どもにしてほしくないことがあっても、母親は祖父母が自分の親でもあるので、父方の祖父母に対してよりも何事も言及しやすいようである。父方祖父母との同居は、母親が祖父母との子育てに対する体験が異なり考え・方法に相異があるので、母親と祖父母間に葛藤が生じる可能性がある。

3-2. 母親の子育て意識と家族形態：祖父母とのかかわり

母親の子育て意識の調査分析をするにあたって、家族形態をまず単純に祖父母との同居世帯と核家族の祖父母近隣居住型と孤立型核家族とに分け、それらを記号化した。

(1)祖父母との同居の三世代同居世帯をE、(2)核(核心)家族世帯をNとし、祖父母が近隣に居住していることで類別し、(3)祖父母が遠方に居住しているため孤立型核家族世帯をNiとした。牧野(1981)は、家族関係と育児不安について、核家族よりも大家族の方に育児不安が多くみられる傾向があるとしていたが、当該論文中には、家族形態について詳細に分類されたことは記述されていなかった。しか

し、そこには大家族のうちでも母方の祖父母と同居の場合が最も育児不安が少ないことを示していた。

したがって西本と小河は、さらに父方祖父母と母方祖父母に分けて比較を試みた結果、母親の子育ての意識に、上述したこととともに種々の傾向がみられたことを見出した。ただし、本稿では、家族形態をつぎのような記号で表わすことにする。

Ef:父方祖父母同居世帯, Em:母方祖父母同居世帯,
Ef+m 父方・母方祖父母同居世帯の合計,
Nfm:父方・母方双方の祖父母が近距離居住型の核家族世帯,
Nf:父方祖父母近距離居住型核家族世帯,
Nm:母方祖父母近距離居住型核家族世帯,
Nt:祖父母近距離居住型核家族世帯の合計,
Ni:孤立型核家族世帯。

本調査を行う際に、父方祖父母との同居は母親が祖父母との育児に対する考えや方法に相異を感じることから葛藤が生じる可能性があると考えた。それによって母親が子育てをするにあたって、肯定的でない面が生じる、と仮説で立てたように、次の結果がみいだされた。

3-3. 祖父母の協力

Ef世帯と孤立型Ni世帯の比較からは、「母であることが好きである」「父方祖父母は子育てに協力的」の2つの項目ともEf世帯の方が孤立型Ni世帯よりも高得点であった。また、前者は、Ef+mがNiよりも得点が高かった(Table 1とTable 2を参照)。

Table 1 「母であることが好きである」

	Family Forms							
	Ef	Em	Ef+m	Nfm	Nf	Nm	Nt	Ni
N	13	3	16	13	21	6	40	26
Mean	4.23	4.33	4.25	4.08	4.24	4.33	4.20	3.19
SD	0.73	0.58	0.63	1.19	3.19	1.03	0.99	1.39
Ni	**		***	*	***	*	***	—
t	3.07		3.29	1.97	3.13	1.89	3.44	

※Ef:父方祖父母同居世帯 Em:母方祖父母同居世帯
Ef+m:祖父母同居世帯計
Nfm:父・母方祖父母近隣居住型核家族世帯
Nm:母方祖父母近隣居住型核家族世帯
Nf:父方祖父母近隣居住型核家族世帯
Nt:祖父母近隣居住型核家族世帯計 Ni:孤立型核家族世帯
*: p<0.1 **: p<0.05 ***: p<0.01

Table 2 「父方祖父母は子育てに協力的である」

	Family Forms							
	Ef	Em	Ef+m	Nfm	Nf	Nm	Nt	Ni
N	13	2	15	13	21	5	39	26
Mean	4.23	2.50	4.00	3.77	2.76	3.60	3.21	3.12
SD	1.01	2.12	1.25	1.17	1.26	1.34	1.30	1.58
Em	*	—						
t	2.00							
Nf	***			**	—			
t	3.54			2.33				
Nt	**		**				—	
t	2.31		2.03					
Ni			*					—
t			1.85					

子育てで祖父母の協力としては、「父方祖父母は子育てに協力的」と感じるのはEfが最も高得点であった。すなわち父方祖父母との関係によると同居している場合が、比較的肯定的な意識を示す傾向があった(Table 2)。三世帯同居世帯の母親は父方祖父母の近隣居住世帯よりも「母として振る舞っている時が自分らしい」「母として気持ちが安定している」ということに関しては肯定的でなかった。さらにTable 2「父方祖父母は子育てに協力的である」²⁹とTable 3「父方祖父母に子どもを預けると子育てがやりやすい」では、同居世帯の方が肯定的な傾向がみられた。さらにTable 3「父方祖父母に子どもを預けた後、子育てがしやすい」では、EfはNfに対し得点が高い。Ef+mがNtとNiに対して高得点であった(Table 3を参照)。つまり母親は祖父母世代との利便性を意識している。

Table 3 「父方祖父母に子どもを預けた後、子育てがやりやすい」

	Family Forms							
	Ef	Em	Ef+m	Nfm	Nf	Nm	Nt	Ni
N	13	2	15	13	20	5	38	26
Mean	3.62	3.50	3.60	3.08	2.90	3.40	3.03	3.04
SD	1.04	0.71	0.99	0.64	0.72	1.14	0.75	1.00
Nf	*				—			
t	2.34							
Ef+m			—				*	*
t							2.28	1.74

なお「お菓子やミルクなどを与える」ことを除けば、3対6項目に母方祖父に対する意識の方が父方祖父母に対する意識より高得点を示していた。つまり仮説どおりに母親は、母方祖父母に対して肯定的な意識をもつ傾向があった。以上より家族形態すなわち、ここでは祖父母との人間関係によって、母親の子育て意識が異なることが明らかとなった。

Table 1 ようにNfなどの近隣NがNiより高得点を示した他の項目としてはTable 4「母であることに生きがいを感じている」があって、NfmがNiより高得点を示した項目とし

てはTable 5「夫は子ぼんのうである」があった。これらはEとNiとの相違はみいだせず、むしろ近隣NとNiとの相違がみられることに特徴があった。

Table 4 「母であることに生きがいを感じている」

	Family Forms							
	Ef	Em	Ef+m	Nfm	Nf	Nm	Nt	Ni
N	13	3	16	13	21	6	40	26
Mean	3.38	3.33	3.38	3.69	3.71	3.83	3.73	3.08
SD	0.65	1.53	0.81	1.03	1.01	0.75	0.96	1.09
Ni				*	**		**	—
t				1.69*	2.06		2.54	

Table 5 「夫は子ぼんのうである」

	Family Forms							
	Ef	Em	Ef+m	Nfm	Nf	Nm	Nt	Ni
N	12	2	14	13	21	6	40	26
Mean	4.00	4.00	4.00	4.54	4.05	4.00	4.23	3.54
SD	0.65	0.00	1.11	0.88	1.12	1.10	1.05	1.21
Ni				**			**	—
t				2.65			2.45	

母方祖父母との三世帯同居世帯でEmに顕著な項目としてはTable 6「子育て以外に生きがいがある」において、Ef、Nf、Niに対して高得点の傾向がみられた。さらに、Emが最も高得点であった項目には、Table 7「自分の関心が子どもばかりには向かず視野は狭くならない」があった。

Table 6 「子育て以外に生きがいがある」

	Family Forms							
	Ef	Em	Ef+m	Nfm	Nf	Nm	Nt	Ni
N	13	3	16	13	21	6	40	26
Mean	3.23	4.67	3.50	3.46	3.00	2.67	3.10	3.00
SD	1.17	0.58	1.21	1.27	1.27	1.63	1.32	1.17
Em	**	—			**			**
t	2.04**				2.22**			2.41**

Table 7 「自分の関心が子どもばかりには向かず視野は狭くならない」

	Family Forms							
	Ef	Em	Ef+m	Nfm	Nf	Nm	Nt	Ni
N	13	3	16	13	21	6	40	26
Mean	3.62	4.33	3.75	3.62	3.05	2.00	3.08	2.92
SD	1.33	0.58	1.24	1.33	1.40	0.89	1.39	1.26
Nm	**	***		**	*	—		
t	2.69	4.04		2.69	1.73			
Nt		*	*				—	
t		1.89	1.70					
Ni		*	**					—
t		1.70	2.08					

「自分の関心が子どもばかりには向かず視野は狭くなっていない」は、三世同居世帯に核家族世帯より高得点の傾向がみられた。さらにこの項目ではNmがEf, Em, Nfm, Nfに比較して低得点の傾向がみられた。

NfがEfやNiに比較して、Table 8「育児に自信がある」、母である(なった)ことにTable 4「生きがいを感じている」Table 9「母になったことで気持ちが安定した」Table 10「母であることに充実感を感じている」と肯定的な傾向を表わした。一方でNfはEfに対して、Table 2「父方が子育てに協力的」Table 11「父方に預けた後、子育てがやりやすい」に否定的であった。

Table 9のように近隣NiがEf+mよりも高得点の項目、「母になったことで気持ちが安定した」もあった。NiはEや近隣Nのような他の居住形態に比較して、全体的に子育て意識で最も低得点の傾向を示した。

Table 8 「育児に自信がある」

	Family Forms							
	Ef	Em	Ef+m	Nfm	Nf	Nm	Nt	Ni
N	12	3	15	13	21	6	40	26
Mean	2.92	3.33	3.00	3.31	3.43	3.17	3.08	2.77
SD	3.43	1.16	0.85	1.11	0.81	1.17	1.39	0.95
Nf	*				—			
t	1.76							
Ni						**	**	—
t						2.52	2.43	

Table 9 「母になったことで気持ちが安定した」

	Family Forms							
	Ef	Em	Ef+m	Nfm	Nf	Nm	Nt	Ni
N	13	3	16	13	21	6	40	26
Mean	3.00	3.67	3.13	3.62	3.71	3.83	3.70	3.42
SD	0.82	1.16	0.89	1.33	1.01	0.98	1.09	1.07
Ef	—				**	*		
t					2.15	1.94		
Ni			*					—
t			1.87					

Table 10 「母であることに充実感を感じている」

	Family Forms							
	Ef	Em	Ef+m	Nfm	Nf	Nm	Nt	Ni
N	13	3	16	13	21	6	40	26
Mean	3.46	3.67	3.50	4.00	3.95	4.00	3.98	3.50
SD	0.78	1.16	0.82	0.91	0.81	0.89	0.83	0.91
Nf	*				—			
t	1.75							
Nt			*				—	**
t			1.94					2.54

Table 11 「父方祖父母に子どもを預けた後、子育てがやりやすい」

	Family Forms							
	Ef	Em	Ef+m	Nfm	Nf	Nm	Nt	Ni
N	13	2	15	13	20	5	38	26
Mean	3.62	3.50	3.60	3.08	2.90	3.40	3.03	3.04
SD	1.04	0.71	0.99	0.64	0.72	1.14	0.75	1.00
Nf	*				—			
t	2.34							
Ef+m			—				*	*
t							2.28	1.74

以上には家族形態についての母親の子育て意識について論じたが、つぎにはその他の変数について記述する。

3-4. 母親の年齢

母親の年齢を低年齢群(19~24歳)、中年年齢群(25~26歳)、高年齢群(27~29歳)に類別し、低年齢群と高年齢群での比較では、つぎの7項目とも低年齢群より高年齢群の方が高得点であった。

「こどもを育てることが負担に感じていない」、「自分の関心がこどもにばかり向いて視野が狭くなっているように感じる」、「自分は母親として不適格ではないかと思う」、「9. 育児に自信がある」、「母になったことで人間的に成長できた」、「母であることに充実感を感じる」、「子育て以外に生きがいがある」

以上より「こどもを育てることが負担に感じていない」では母親の年齢が高くなるにしたがって負担を感じなくなる傾向がある。体力的には若い母親の方がいるので、年齢が高い母親の方が肉体的には負担が大きいと推察されるが、高い年齢で出産した母親の方が子をもつための精神的な準備が整っていた、切望感が強かった、あるいは精神的ゆとりなどがあったことによるのかもしれない。

また「母であることに充実感を感じる」低年齢群と中年年齢群とでは得点が近似していたが、高年齢の点が高かった。さらに他の項目でも全般的に高年齢群の得点が高いことは精神的な発達によるのかもしれない。

青木・松井・岩男(1986)では、「子育て、母の役割の受容が否定的であることは精神的、肉体的は疲労感及び夫の育児への関与の低さと関連することが明らかとなった」と報告している。しかし本稿では、因子分析の結果、5因子が見出され、そのうち「子育て以外に生きがいがある」という第1因子と母親の疲労感である第5因子には、相関関係はなかった。その理由としては、青木らの研究では、因子の分類が2種類しかなかった。そのため本調査結果と異なると考えられる。しかしながら以下のことに青木らの結果と共通していた。本研究での因子分析において、「母親の視野の広がり因子」と「夫の援助因子」には、相関関係(0.52)がみられたことである。つまり「他の生きがい」があり、「視野が狭くなっていない」母親は、夫が育児にかかわる評価

を高くしている。さらに「子育て以外に生きがいがある」とする母親は、精神的肉体的な疲労感が少ないとともに夫の育児への関与が高い、と示している傾向があった。

3-5. こどもの年齢

こどもの年齢によって親を4つのグループ①：4歳未満、②：4歳、③：5歳、④：6歳に分けて比較検討を行った。

(1) 4歳児未満と4歳児：4歳児未満と5歳児と年齢群での顕著な違いはみられなかった。

(2) 4歳児未満と6歳児：これらの年齢群間では、やや違いがある項目がみられた。

「こどもと一緒にいると心がなごむ」と「母方の実家の祖父母がこどもとかかわることが負担である」の2項目とも4歳未満のこどもをもつ母親の方が高得点であった。つまり4歳未満児の母親にとっては全く負担ではないかあるいはややそうではないであったが、6歳児をもつ母親はやや負担ではないかどちらともいえないかであった。

(3) 4歳児と5歳児：「父方祖父母は子育てに協力的である」の項目で、4歳児をもつ母親の方が5歳児をもつ母親よりも高得点であった。すなわち、父方祖父母は子育てに協力的であると4歳児をもつ母親の方が5歳児をもつ母親よりも感じている。

(4) 4歳児と6歳児：「育児は肉体的に疲れる」の項目で、4歳児ではやや疲れるといえるがどちらともいえない傾向にもあった。両者とも、否定的な傾向で育児は肉体的に疲れると示しているが、6歳児をもつ母親では低得点であるのでさらに疲れる傾向がみられた。

(5) 5歳児と6歳児

「母になったことで気持ちが安定して落ち着いた」の項目では、6歳児よりも5歳児をもつ母親にその傾向がみられた。また「母方の実家の祖父母がこどもとかかわることが負担である」の項目では、6歳児よりも5歳児をもつ母親が負担と感ずるようであった。

(2)と(5)より4歳児未満の母親と5歳児をもつ母親は、母方の祖父母がこどもとかかわることが負担ではないという傾向を示している。しかし6歳児をもつ母親にとっては、母方の祖父母とかかわることが負担になるように変化している。

さらに「子育て以外に生きがいがある」ということで第一子の年齢を以下の3つに分けた。

こどもについて、高年齢群は10歳以上(N=8)、中年齢群は5~9歳(N=59)、低年齢群は4歳以下(N=30)に分けて検討した。低年齢群(3.30)は、高年齢群(2.00)に対して高得点であった(p<0.01)、中年齢群(3.24)も高年齢群(2.00)より高得点であった(p<0.01)。つまり高年齢群をこどもにもつ母親は子育て以外に生きがいがないということがいえる。また、「母方祖父母にこどもを預けた後、子育てがやりやすい」では中年齢群(3.84)が低年齢群(3.23)より得点が高かった

(p<0.01)。

牧野(1981)では、母親の年齢と育児不安の程度とはほとんど関係がなかったと報告しているが、青木らの報告では、子育てに対する否定的な意識が母親自身の年齢ではなく、第一子年齢により異なると示していた。これは本稿でも項目数が少なく断定的なことは言えないが、上記2項目について結果を得た。また、すでに考察したように、母親の子育て意識は初産年齢に有意差がみられた。このことから、第一子の年齢よりも初産年齢に強く関係していることが明らかとなった。これは、単純に母親の年齢が高いというのではなく、第一子出産時の母親の年齢が子育て意識に関係するといえる。

すなわち、第一子を産む年齢が高い程、母親であることに充実感をもち、こどもを育てることを負担に感じていないことを示していた。以上より次のことが導き出された。

(1) 仮説で述べたように家族形態においては、母方祖父母との三世同居世帯は核家族に比べ子どもを育てるにあたって、「母親の視野の広がり因子」において、肯定的な傾向があった。

(2) 父方祖父母との同居は母親が祖父母との育児に対する考えと方法に相異が感じられることから、葛藤が生じる可能性がある。それによって、母親が子育てにあたって、肯定的でない面が生じる、と仮説で立てたように、同居世帯の母親は父方祖父母の近隣居住世帯よりも、「母として振る舞っている時が自分らしい」「母として気持ちが安定している」ということに関しては肯定的でなかった。しかし、「父方祖父母は子育てに協力的である」と「父方祖父母に子を預けると子育てがやりやすい」では、同居世帯の方が肯定的な傾向がみられた。

(3) 近隣の核家族は3世代同居世帯と同様の結果を示す傾向があった。なかには、近隣の核家族が同居の家族世帯よりも高得点の項目もあった。そして、孤立型核家族は同居世帯や祖父母近隣核家族世帯と比較して、全体的に低い傾向にあった。つまり子育て意識で最も肯定的でない傾向を示した。

(4) 初産年齢については、第一子を産んだ時の母親の年齢が高い程、母であることに充実感をもち、子どもを育てることを負担に感じていないことが明らかとなった。

(5) 仮説に加えて、青木らの先行研究との比較によって、母親の子育て意識は第一子の年齢よりも、むしろ、初産年齢に強く関係していることが明らかとなった。

(6) 課題としては、家族形態を詳細に分類するとそれぞれの対象が少ないために特定の違いがあっても有意差認められないものはいくつかあった。さらに、対象数を多くした調査が必要であると考えられる。

(7) 母方祖父母と同居することによって、母親の子育て意識によっても父親が母方祖父母との同居を満足していなければその環境や考え方などが、子育てを行う際に弊害がある

可能性があるので今後検討を要する。

IV. 世代間意識調査からみる親の活動欲求充足と子どもとの愛着の絆との葛藤

前節のことをも含めながら西本と本玉(2006, 2007)³⁰は、子育て観や子育て意識がどのように受け継がれて、実際に行われてきたのかを調査した。現在子育てを行っている母親と祖父母世代を対象として、子育てにかかわる会話を記録した。会話分析をするにあたって、価値の転換に課する理論を援用して個人の自己状況の「経済、活動、愛着性、健康、価値観」5状況に内容を分類して、さらにそこから本稿では、「活動」と「愛着性」に焦点をあてて報告する。

(1) 祖父母世代と親世代から、子どもを取り巻く環境、たとえば生活時間、遊び空間、とともに仲間関係の3つの間が変化したことによって遊び方の変化が指摘された。

(2) 親世代から、自らが子育ての知識や方法を学習する人間関係や機会を失ったことが話されていた。さらに、将来子ども世代が、親になったときには、子育てに、より深刻な状況を生じさせるかもしれない。つまりかつて祖父母世代が子育てをしていた時代では、まだ地域社会の残渣が機能していたが、現代の親世代には地域での支援は期待できず、孤立した核家族であって、(3)ともかかわって、母親にはドゥーラに相当する人物がいないのである。

(3) 依然として、子育てを母親が父親より担う、とする意識が、社会に存在している、と親世代によって指摘されていた。しかしこれも今の祖父母世代から頃のことであって、それ以前は夫婦で子育てをし、さらに地域に居住している。その親の世代にも預けていた。そのような子育てを親が担うようになったのは、ここ近年の世代での限られたことである。これによって現代の親世代は、子育てを負担に感じってしまうことになったと考えられる。

(4) 親世代の意見には、自己のこどもの行動を他者のこどもの行動と比較してしまうことによって、優劣を気にすることを示していた。

(5) 親世代にみられた逸話として、子育てにかかわる問題点について、親世代が自ら話題にしたり意識したりすることにはよいが、同様の事柄について姑(夫の母親)が述べることには、批判(嫌悪感)が生じる、と親世代が述べていた。つまり自己自身による発言と姑に対する思いに矛盾性があることを、親世代(母親)は自覚し発言していた。親は祖父母の助けは欲しいが、それにかかわる干渉とみなされることばを拒否する。

(6) こどもが家の中を散らかす行為が、その整然さを維持しようとする親世代の欲求を妨げるものとしてしまう、ことを示していた。

(7) 祖父母世代は、子育てをしながら、こどもの存在があるからこそ、そのために仕事への意欲(活動欲求)がより強くなっていた、という。一方で、親世代にとっては、子育てや

こどもの存在は、自己の活動を妨げるものとなる、としていた。

(8) 親世代は、同世代の人びとに、こどもに愛着性を有しない人物がいることを話していた。このようにこどもとの間に愛着の絆を形成しない親世代をつくりだしてしまった原因について、祖父母の世代は、自らの世代がこども(親世代)に溺愛的な養育をしてしまったことに責任があると証していた。

(9) 祖父母世代は、親世代の意識について、次のように言及した。こどもを「計画的に作るもの」であるから、作らないことも可能である、とする意識によって、親世代が子に愛着の絆を有しなくなった一つの理由であろう、と推察していた。上記に加えて親世代も、自らの世代の自己愛性傾向は、親(祖父母)による子(親世代)への溺愛傾向による子育ての結果であることを、職場の体験から例として示唆していた。たとえば、入院患者である親(祖父母世代)が、病院に見舞いに来ない子(親世代)を自慢していること³¹がある。

(10) 自己愛性的に育てられた親世代は、自己欲求を充足させることを優先することに価値をおく。それが満たされないと、自らのこどもであろうと排除する³²。これらのことから子の存在が、夫婦関係の絆を維持する「かすがい」の役割を果たしていたのは過去のことにもなってしまった。すなわち現代の親世代では、こどものために耐え難い夫婦関係を維持することはなく、各配偶者は各個人の自己主張を図ること(自己の欲求充足)の方が優先課題³³となっている。したがって、その目的を果たすために、容易に夫婦関係を解消してしまう。さらに祖父母世代であっても、親世代の自己欲求充足を優先することを、促進させてしまう言動を有する。とくに親と娘との関係について、娘の結婚時やその後についての親がもつ意識に時代的推移がみられた例も見出された。かつては、祖父母世代が婚姻した時代には、嫁いだ娘を実家には戻さない意識があった。しかし現代では、祖父母世代は嫁いだ娘に対して、嫁ぎ先で何か問題が生じたときには、実家に戻ることを許容している。むしろいつでも歓迎することさえ示す傾向がある。平井信義ら(1976)によると「自己中心性の強い性格の女性は結婚しても、自分の思い通りの生活楽しむことが予想され、子どもを欲しない傾向にある」とされており、このような女性は少数派とされていた。当時は社会の意識のなかで認められ難かったのか「わがまま」な人物として著され、しかも「真にわがままなものは、自分のわがままさえ気がつかない」とまで記されていた。しかしながら現代では女性が主張することは当然のこととなっている。しかも当時と現代の親子家族の一世帯あたりのこども数は平均2.0~2.3人と数十年著しい変異はないのである。むしろ現代のこども数の減少は、いわゆる結婚適齢期あるいは出産の可能性のある年齢層とくに第二次ベビーブーム世代が、未婚(非婚)のままである割合の増加によって出生数の伸びが留まっている

ことによる。

(11) ある母親は、こどもが疾病となってこどもの活動が普段より低下すると、愛着の対象として存在するこどもが、元の健康状態に戻るよう原状回復を願う、という。しかし、こどもが元気な状態(健常)となると、こどもの種々の行為が、親世代の自己活動を妨げることとしてみなすようになる、としている。つまり親世代にとっては、自己の活動欲求がこどもの健康状態によって変動することを表した。

(12) 現代の親世代の男性は、祖父母世代によって子育てをされたときに、厳しいしつけを受けたことが少なくなったことと、愛情というよりむしろ甘やかしや溺愛による子育てを受けた経験から、優しさや自己愛性を有する。それゆえ父親は、祖父母世代より、さらに厳しさを欠く子育て態度をとるようになったので、しつけの担い手ではなくなった。しかも並行して地域社会による子育てにかかわる教育力も失われてきたので、家庭内の母親にしつけの担い手としての役割が収斂してしまうことになった。

(13) 家庭内の唯一のしつけの担い手としての負荷が、母親に多大な抑圧を与えるとともに、母親のもつ自己欲求の充足を行いたいとする活動欲求とが拮抗することによって、子育てにかかわることと葛藤がおき、情緒的行為が噴出したり、かつてよりこども観や子育て意識に変容が生

じたりしているのかもしれない。

(14) 就労を欲求充足のひとつとすると、それが当然とみなされている父親(夫)は一般的に欲求充足を果たしていることが前提になっている。したがって、そのことが条件となっている専業主婦である母親(妻)からすれば、近年の女性の就労傾向もみるようになって、欲求が充足されていないことになる。

以上より、西本と本玉による調査研究(2006, 2007)では、親世代の母親たちからは、こどもや子育てにかかわる自己欲求充足との葛藤が示されたが、祖父母世代に対する言及はみられなかった。さらに祖父母世代から親世代の子育てに対する言及としては、親世代がこどもに投げかける言葉の乱暴さを気にする発言もあった。さらに当該調査での協力者である祖父母世代は、普段から子育て支援を行っている人びとである。上記にも示したように、祖父母世代が自らの子育てによって現代の親世代が示すような行為をさせてしまうように育ててしまった自己反省をしていた。これらのことは、子育ての世代間での伝達について、結果が意図せざるを得ないことになったとしても、一つの示唆となるかもしれない。

—注および引用文献—

- 1 東洋・柏木恵子・ヘス『母親の態度・行動とこども知的発達』東京大学出版会, 1981
- 2 Robson, K.S.& Moss, H.A, Patterns and determinants of maternal attachment, *Journal of Pediatrics*, 77, 1970, pp.976-985
- 3 花沢成一「妊娠時苦悩度と母性感情との関係—母性心理学研究IV」『日本心理学会第20回総会論文集』1978
- 4 花沢成一「妊産婦におけるつわり症状と母性発達との関係—母性心理学研究VI」『日本心理学会第43回大会論文集』1979
- 5 大日向雅美「母性意識の発達変容について—母親の教育歴・就労形態・年齢別の分析—」『日本教育心理学会第24回総会発表論文集』1982, pp.298-299
- 6 高橋恵子「母親のわが子に対する愛着の発達」『日本心理学会第40回大会発表論文集』, 1976, pp. 767-768
- 7 九嶋勝司他「妊産婦の心理的研究(1)妊婦の情動的特性」1966
- 8 総理府青年対策本部『幼児をもつ母親の意識に関する調査』1983
- 9 前掲論文: 大日向雅美 1982
- 10 柏木恵子「こどもの発達環境としての女性, 母親, 家庭をめぐる現状と問題」『母性研究』第5号 1981, pp.226-245
- 11 青木まり・松井豊・岩男寿美子「母性意識から見た母親の特
- 徴—ライフステージ, 自己評価, 充実感との関係から—」『心理学研究』第57巻 第4号 1986, pp.207-213
- 12 金子智恵子・斎藤浩子・青柳肇「働く母親の母子関係とこどもの自主関係について」『母性研究』, 第5号 1982, pp.204-211
- 13 牧野カツコ「乳幼児をもつ母親の生活と<育児>不安」『家庭教育研究所紀要』第3号 1982, pp.34-56
- 14 牧野カツコ「母親の就労化と家族関係」『教育社会学研究』第44集 1989, pp.50-64
- 15 本村汎・磯田朋子・内田昌江「育児不安の社会学的考察—援助システムの確立に向けて—」『大阪市立大学生活科学部紀要』第33巻 1985, pp.11-12
- 16 原ひろ子編『母親の就業と家庭生活の変動』弘文堂 1987, pp.75-78
- 17 Hoffman, L.D. Maternal Employment. *American Psychologist*, Vol.34, No.10, 1979, pp.859-865.
- 18 直井道子「直系家族における主婦の権威主義的性格」『社会学評論』第37巻 第3号 1986, pp.201
- 19 中山慶子「女性の職業アスピレーション—その背景, 構成, ライフコースとの関連—」『教育学研究』第40集, 1985, pp 65-86
- 20 クラウス・ケネル, 竹内徹・柏木哲夫・横尾京子訳『親と子のきずな』医学書院 1985
- 21 原典訳では, 看護婦(同上書)

- 22 原典訳では、小児虐待（同上書）
- 23 経済企画庁国民生活局国民生活調査課編集『図でみる生活白書』大蔵省 1991, pp.40-47
- 24 **方法**：対象者：3～6歳児(平均4.76歳)をもつ計103名の母親(平均年齢34歳)。実施方法：質問紙を幼稚園の経由で保護者(母親)に記入後、回収。質問紙調査法：大日方(1982)と青木・松井・岩男(1986)もとした5段階評定。居住形態を物理的距離から3区分とし、祖父母の親族形態を父方、母方の2類型に分けた。
- 25 「関西圏における親子の世代間の生活規律・社会的ルール意識の位相研究」武庫川女子大学関西文化研究センター；2004年度、文部科学省私立大学学術研究高度化(学術フロンティア)推進事業「関西圏の人間文化についての総合的研究—文化形成のモチベーション—」に基づく研究。
- 26 たとえば、国立社会保障・人口問題研究所「理想のこども数をもたない理由」第12回出生動向基本調査(2002)『厚生労働白書』2003。
- 27 Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S., *Patterns of attachment; Assessed in the Strange Situation and at Home*, Hillsdale, N. J., Lawrence Erlbaum 1978.
- 28 ロールズ, S. W.・シンプソン, J. A., 遠藤利彦・谷口弘一・金政祐司・申崎真訳『成人のアタッチメント-理論・研究・臨床』北大路書房 2008 に所収。
- 29 そのなかで祖父母に関する4項目(8項目)について、それぞれ対(a=父方)(b=母方)の祖父母に対する比較を行なった。
- 30 1. **調査地の概要**：K市は、都市中心部への通勤距離圏に位置していて、ベッドタウンの一つとしてよばれている。当該市の年少者(15歳未満)人口比率15.7%、高齢者人口比率15.0%。2. **調査対象者**：①祖父母世代(2002年7月12日調査)：1学園(高齢者を対象にした県立の生涯教育センター)に集う「あすなる会」60歳以上の地域活動を行っている男女各4人の計8人。②親世代(2004年8月4日調査)：子育てグループとして活動している母親たち。全員が30歳代でこどもを有し、子育て学習センターを拠点にグループ活動をしている。女性9人。3. **調査方法**：VTRカメラを用いて、会話を収録した。ここでは調査研究者の意図や特定の価値観によって、調査対象者の意見内容が影響を及ぼされないようにするため、基本的には対象者の人びとに自由に会話をしてもらう形式で進めるよう配慮した。ただし、調査対象者の会話が、中断したり、その内容がこどもにかかわる事柄以外の話題へと、話の筋が大きく異なった方向に反れそうになったりしたときだけ、調査研究者が質問等を投げかけるようにした。4. **記録の分析**：調査で得られた子育て意識の内容を解釈するにあたって、価値の転換に関する理論を援用した。個人の意識の変化過程を呼応させる形式で応用したもので、これによって、得られた結果を、個人の自己状況にかかわる「①経済、②活動、③愛着性、④健康、⑤価値観」の5つの内容に類別した。詳細については、西本望、本玉元「世代間でのこども観および子育て意識の相違—K市における聞き取り調査：各世代のこどもの見方・考え方」『関西の子育て文化』(関西文化研究叢書5)武庫川女子大学関西文化研究センター、2006, pp.51-63, 109-144を参照のこと。
- 31 たとえば病室に見舞いに来ないような子(親世代)に対して「優しい」「いい子だ」と病院の職員や同室の入院患者に話す人物がいることが病院業務にかかわった対象者からの証言があった。
- 32 上の例では、自己愛性パーソナリティを有する親世代は、自らの親(祖父母世代)でさえ、自己の活動欲求の妨げになる状況に陥ると、たとえ恩恵をこうむってきたはずの人物であっても、そのときに自己の活動欲求を充足させてくれる存在でなければ排除してしまう。
- 33 平井信義・千羽喜代子・今井節子『母性愛の研究』同文書院 1976, pp.135-138

—参考文献—

- (1) 青木まり・松井豊・岩男寿美子「母性意識から見た母親の特徴—ライフステージ」自己評価、充実感との関係から—」『心理学研究』第57巻 第4号 1986, pp. 207-213
- (2) 東洋・柏木恵子・ヘス『母親の態度・行動とこども知的発達』東京大学出版会, 1981
- (3) 牛島義友, 4名他『教育心理学新辞典』, 金子書房, 1974。
- (4) 大日向雅美「母性意識の発達変容について—母親の教育歴・就労形態・年齢別の分析—」『日本教育心理学会第24回総会発表論文集』1982, pp. 298-299
- (5) 柏木恵子「こどもの発達環境としての女性、母親、家庭をめぐる現状と問題」『母性研究』第5号 1981, pp. 226-245
- (6) 金子智恵子・斉藤浩子・青柳肇「働く母親の母子関係とこどもの自主関係について」『母性研究』第5号 1982, pp.204-211
- (7) 経済企画庁国民生活局国民生活調査課編集『図でみる生活白書』大蔵省 1991, pp. 40-47
- (8) クラウス, M.H.・ケネル, J.H., 竹内徹・柏木哲夫・横尾京子訳『親と子のきずな』医学書院, 1985 (Klaus, M.H. & Kenell, J.H., *Parent-Infant Bonding*, 2nd ed., C. V. Mosby, St Louis, 1982)
- (9) 黒田実郎編著『乳幼児発達事典』岩崎学術出版, 1985
- (10) 甲府市教育委員会『女性問題に関する市民意識と実態調査』1990
- (11) 国立社会保障・人口問題研究所(「理想のこども数をもたない理由」第12回出生動向基本調査(2002)『厚生労働白書』2003
- (12) 総理府青年対策本部『幼児をもつ母親の意識に関する調査』1983
- (13) 高橋恵子「母親のわが子に対する愛着の発達」『日本心理学会第40回大会発表論文集』1976, pp. 767-768

- (14) 堤マサエ「母性形成過程の社会学的研究—三地域の母親を中心に—」『山梨県立女子短期大学紀要』第18号 1984, pp. 9-22
- (15) 堤マサエ「母子問題形成過程の事例分析」『山梨県立女子短期大学紀要』第19号 1985, pp. 61-76
- (16) 直井道子「直系家族における主婦の権威主義的性格」『社会学評論』第37巻, 第3号, 1986, p. 201
- (17) 中山慶子「女性の職業アスピレーション—その背景, 構成, ライフコースとの関連—」『教育学研究』第40集 1985, pp. 65-76
- (18) 西本望・小河佳子「祖父母との居住形態と母親の養育意識」日本発達心理学会 第11回大会(於: 東京女子大学) 2000
- (19) 西本望「喪失と移行対象—心の転換と適応の過程」『玩具福祉研究』第3号 2004, pp. 2-12
- (20) 西本望・本玉元「親の活動欲求充足とこどもとの愛着の絆との葛藤について—世代間でのこども観および子育て意識の変容調査より—」日本保育学会第60回大会(於: 十文字学園女子大学) 2007
- (21) 西本望・本玉元「世代間でのこども観および子育て意識の相違—K市における聞き取り調査: 各世代のこどもの見方・考え方」『教育学研究論集』第1号 2006, pp. 137-164
- (22) 原ひろ子他『母親の就業と家庭生活の変動』弘文堂1987
- (23) 花沢成一「妊娠時苦悩度と母性感情との関係—母性心理学研究IV」『日本心理学会第20回総会論文集』1978
- (24) 花沢成一「妊産婦におけるつわり症状と母性発達との関係—母性心理学研究VI」『日本心理学会第43回大会論文集』1979
- (25) 繁多進『愛着の発達—母と子の結びつき』大日本書籍, 1987
- (26) 平井信義・千羽喜代子・今井節子『母性愛の研究』同文書院, 1976
- (27) Hazan, C. & Shaver, P.; Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 1987, pp. 511-524
- (28) ボウルビィ, J., 黒田実郎訳『母子関係の理論』I 愛着行動, II 分離不安, III. 対象喪失, 岩崎学術出版, 1976, 1991, 1977, 1981 (Bowlby, J., *Attachment and Loss*, Vol.1 Attachment, Vol.2 Separation Vo3. Loss: Sadness and Depression, Basic Books, New York, 1969, 1982, 1973, 1980)
- (29) Hoffman, L.D. Maternal Employment. *American Psychologist*, Vol. 34, No. 10, 1979, pp. 859-865
- (30) 牧野カツコ「乳幼児をもつ母親の生活と<育児>不安」『家庭教育研究所紀要』第3号 1982, pp. 34-56
- (31) 牧野カツコ「母親の就労化と家族関係」『教育社会学研究』第44集, 1989, pp. 50-64
- (32) 本村汎・磯田朋子・内田昌江「育児不安の社会学的考察—援助システムの確立に向けて—」『大阪市立大学生生活科学部紀要』第33巻 1985, pp. 11-12
- (33) 見田宗介他編『社会学事典』弘文堂, 1988
- (34) 山梨県教育委員会『家庭教育(幼児期)相談事業実績報告書 昭和60年度』1985
- (35) 山根常男『家族の論理』垣内出版 1972, pp. 296-298
- (36) ロールズ, S.W.・シンプソン, J.A., 遠藤利彦・谷口弘一・金政祐司・申崎真士監訳『成人のアタッチメント—理論・研究・臨床—』北大路書房, 2008
- (37) Robson, K.S.& Moss, H.A, Patterns and determinants of maternal attachment., *Journal of Pediatrics*, 77, 1970, pp.976-985

(受理日: 2010年1月20日)